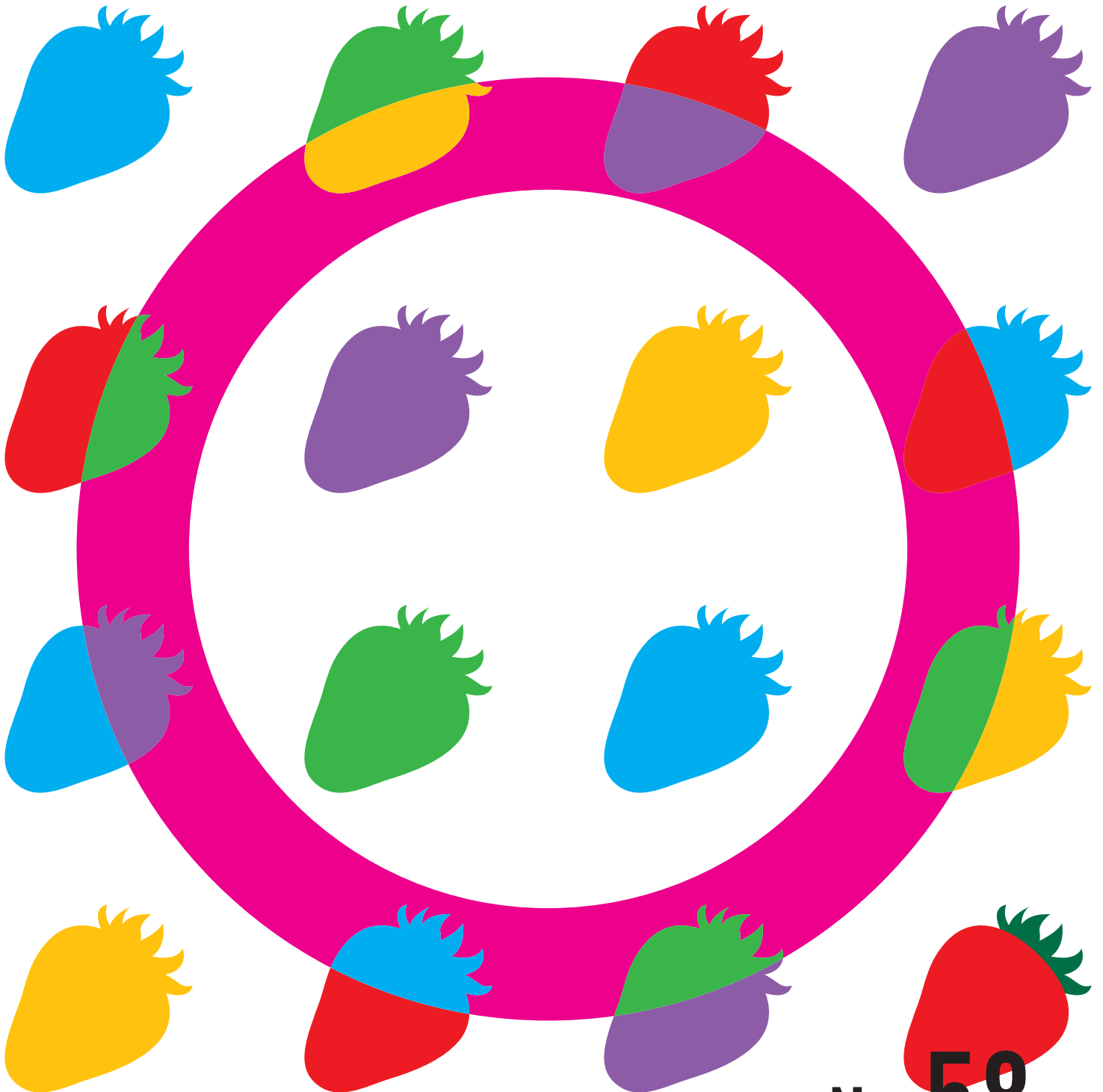


GAKKAN

Interfaculty Initiative in Information Studies and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo



No. 58
2022 SPRING

「当たり前」に疑問や好奇心を持つ

久野 愛 准教授

感覚史研究を学際的に取り組む久野愛先生のインタビューです。
学環着任までのことから、今後のご研究の展望と、学生に期待することを伺いました。



——久野先生は2021年度に情報学環に着任されました。学環に来られるまでのご経歴とご専門についてお聞かせください。

学部は東大の教養学部でアメリカ研究を専攻しました。そこで受けた授業やお世話になった先生方のお話から、文化研究、特に社会史・文化史の面白さを知りました。私は料理や食べることが好きということもあって、特に食文化に興味を持ったんです。今では食研究は世界的に盛んになりましたが、当時は、文化人類学などの一部の学問を除いて、食べ物はそれほどシリアスな学問対象ではなかったこともあり、特に日本における歴史学では研究の蓄積はまだ多くはありませんでした。いろいろ文献に当たる中で、食や食関連のことは研究の対象になり得ると思い、修士に進んでからは食品業界や食品のマーケティングも含めて研究を始めました。

修士の後、総合印刷会社で2年勤務したのち、博士課程に戻り、アメリカのデラウェア大学のPhDプログラムに入りました。デラウェア大学には技術史をはじめ文化史やビジネスヒストリーなどの領域を合わせたプログラムがあり、そこで消費研究、コンシューマリズムがご専門の先生について、研究を始めました。ここで博論のテーマや自分の専門を探る中で、特に食べ物の「色」に興味を持ちました。実はそれまで、あまり研究されていませんでしたが、重要な研究テーマだと考え、博論で取り組みました。

その後、1年間、ハーバードビジネススクールでビジネスヒストリーを対象にしたポスドク研究員を務めた後、京都大学経済学研究科の国際プログラムで3年半講師をし、2021年4月に学環に参りました。

私は歴史学という学問が軸にありますが、文化研究、技術やビジネスなどの分野を横断するように、一貫してインターディシプリナリーな研究をしています。情報学環は非常に学際的なところで、私にはぴったりだと思っています。人々の日常生活や価値感、特にみんなが「当たり前」に思うようなことが、実は当たり前ではなく、長い歴史であるとか、さまざまな要因の中で作られてきたものであるということ、歴史的なアプローチで少しでも解明したいという動機で研究をしています。

——最新のご研究と、これから学環で取り組んでみたいご研究についてお聞かせ下さい。

ちょうど研究の変わり目の時期で、博論で始めた食べ物の色をめぐる研究を2019年に英語で出版し、つい最近、国内で新書を出し、一区切りついたところ

です。これを広げる形で、今は感覚と感情の歴史に取り組んでいます。大きく言うと、感覚とか感情がいかにか歴史的に構築されてきたかという事を研究したいと思っています。特に興味があるのは、19世紀末以降に起こった産業化や工業化の影響で、経済的にも私たちの生活が大きく変わったことが、如何に私たちの感覚や感じるものに影響があったかということです。19世紀末の人工香料の登場、プラスチックの登場、フォードの大量生産など、また、戦争によって進む技術の民間転用、また、戦時の物資欠乏と戦後特需のギャップが生み出すものが影響を及ぼしたと考えられます。

著書でも少し触れていますが、具体的には、食品産業の発展によって、食べ物が変わったり、ファッション業界では、衣類の大量生産、ナイロンやポリエステルなどの人工的な繊維の登場で、肌に触れる感覚が変わったと思います。見た目もいろんなデザインが登場し、視覚的にも変わったと思いますが、そういった新しい商品が私たちの生活を大きく変えた。その中で、感覚、感情に如何に影響があったのかということを見たいなと思っています。

もう一つは、環境、空間の変化。日本で言うと20世紀前半の東京タワーや三越百貨店などの登場や新興住宅地の影響で人々の感覚感情がどのように変化したのかを研究したいと思っています。研究対象地域としてはアメリカを中心に、比較対象として日本や欧州も含め、ニューヨーク、東京、ロンドン、パリなど比較的地理的に絞った形で都市の生活の変化を考えています。まだ漠然としていて、まずはインダストリアルデザインの資料を集めていますが、具体的には落とし込めていないというのが現状です。

情報学環には、理系文系両方の先生がいらっしゃるの、将来的には、可能であれば工学系の先生でセンサーやロボットの研究をされている先生方と共に文理を超えた研究ができると面白いなと思っています。

——これからゼミをお持ちになるかと思いますが、ゼミ生、そして学環の学生に期待することは？

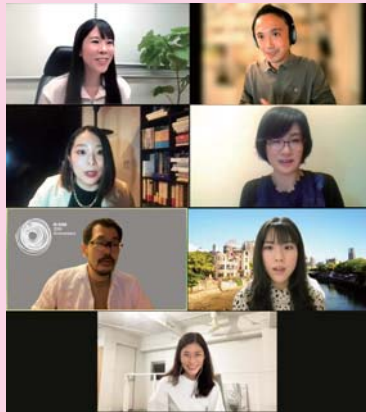
研究にはパッション、熱意があることが重要です。それが原動力になります。それから、当たり前を当たり前と思わないこと。ちょっとしたことにもヒントがあって、何にでも疑問を持つことが、自分の研究のトピックを見つける事にもつながるし、調査の方法や答えを見つけるきっかけになるのではないかと思います。

そして、クリエイティブであることを大切にしてほしいです。私も博士課程の時に、クリエイティビティが研究には必要だと先生に言われたんですけど、自分の研究とクリエイティビティがどう繋がるのか、その時はうまく理解できませんでした。当時は研究というものは、過去の研究の蓄積があって、そこからまだ解き明かされてないこととか、人がやってないこととか、新しい問いというものに答えるもののように思っていました。でも、それを思いつくとか、新しい手法を考えることは、すごくクリエイティブな作業だといえます。クリエイティビティは研究に不可欠で、学生にもそれを常に意識してほしいと思っています。

ホームカミングデイ2021

2021年10月16日、東京大学ホームカミングデイ「越境する学び・研究・キャリア」を開催しました。大学本部の企画「2021年度女子中高生向け進路選択支援に向けた広報活動」と連動し、過去・現在に情報学環との接点がある多様なパネリストとともに二部構成でのパネルディスカッションが行われました。第一部では、モデレーターの筑康明准教授、松田英子助教とともに戸矢理衣奈・生産技術研究所准教授と藤嶋陽子さんが、第二部では、モデレーターの開沼博准教授とともに小林エリカさんと庭田杏珠さんが、越境することの難しさ・楽しみ、越境する先人が自分に与えた影響、時間や表現方法を越境することの魅力、自分の関心が情報学環・学際情報学府とつながったきっかけなどさまざまなテーマに触れながら議論を展開しました。

記事：開沼博(准教授)



2021 日韓台 シンポジウム

“Staying Connected: Voice and Hope in a Time of Challenge”

2021年10月30日、東京大学大学院情報学環・学際情報学府、ソウル大学校社会科学大学言論情報学科、国立政治大学伝播学院が共催する国際シンポジウムが開かれ、日本、韓国、台湾の大学院生と教員が一年ぶりに再会しました。「Staying Connected: Voice and Hope in a Time of Challenge」いうテーマを挙げ、国立政治大学伝播学院の主催で開かれた今年のシンポジウムには、各大学の教員や学生など合計100名に至る方々が参加登録されました。東大からは4名の学生が研究発表を行い、吉見俊哉先生と久野愛先生がコメントーターを務めてくださいました。長引くパンデミックの影響で今年もオンライン開催になったものの、長年築き上げてきたお互いへの信頼や友情、相変わらずの研究に対する情熱、そして同時代を生きる者としての共通の問題意識を確認しあう時間になりました。

記事：イ・ミンジュ(助教)



コロナ禍におけるオンライン懇談会の工夫 ～Gatherを用いた会話の参入障壁の低減の試み～

コロナ禍で学生が対面でコミュニティを作る機会が減る中、2022年1月8日(土)にオンライン新年会・懇親会を、レトロRPGゲーム風通話アプリGatherを用いて実施しました。入学後企画したZoomでの懇親会では、急に会話に入っていくことのハードルの高さを感じましたが、修士構想発表会にて伺った、同じ問題意識を持つ方の発表で「話しかけにくい」ことができる状況と「会話に放り込まれる」状況では、会話のしやすさに差があると知りました。Gatherは、アバターを操作しながら同じ空間でも近くの人とだけ会話ができるなど、会話のスペースに参加「しにくい」ことができるため、障壁を低減できるのではないかと考えました。今後もオンラインで学生の交流の場を作りつつ、そのノウハウを研究や実務にも活かしたいと思います。

記事：徳原拓哉(修士課程)



東京大学制作展2021 「キョリブレーション」

第23回東京大学制作展2021「キョリブレーション」を2021年11月19日(金)より5日間にわたりオンライン開催しました。「キョリブレーション」とは、「距離」と「キャリブレーション(校正)」を掛け合わせた造語で、「私とものとの間にはぴったり重なることのない「距離」があり、様々な対象に感じる物理的・心理的な「距離」から、それぞれの個性が浮かび上がる。精度を校正する行為であるキャリブレーションのように、それぞれの「距離」に向き合い、自らの感覚を問い直す。」という想いが込められています。どのように自他の「距離」を見つめ直すことができるのか、学生が作品と対峙する中で考えて制作・展示を行いました。作品制作者やゲストをお招きして「東京大学制作展 the Live」も実施しました。

記事：市倉愛子(修士課程)





遠藤基郎 教授

史料編纂所では、奈良東大寺に伝わった文書の史料集編纂に30年間携わってきました。平行して東大寺文書のアーカイブ論にも取り組んでいます。また編纂の補助ツールとしてオンラインデータベースの充実にも努め、無手勝流ながら目録・フルテキストデータベースのコンテンツ作成にも関わっています。他にも12・13世紀頃の朝廷政治史研究なども細々と行っています。



田中東子 教授

専門はメディア文化論、カルチュラル・スタディーズ、第三波以降のフェミニズム諸理論で、ポピュラー・フェミニズムの観点から女性たちの実践について研究しています。またB' A Iグローバルフォーラムでの活動を通じて、ジェンダー平等、さまざまなマイノリティにとって公平な社会を創出するための新しいテクノロジーの可能性を追求したいと考えてます。



梶屋友子 教授

東洋文化研究所からの流動教員として参りました。専門はイスラーム美術史、7世紀に始まった一神教イスラームの下で作られてきた建築、写本芸術、工芸について研究しています。特に13～14世紀にモンゴル帝国の一部としてイラン・イラクを支配していたイル・ハーン朝の美術に見られる東西文化の交流に関心を持っています。



李 美淑 准教授

メディア・ジャーナリズム研究を専門とし、他者との「境界」がどのように(再)構築、強化されるのか、また、一方で、どのように「境界」を越え、他者との「連帯」が志向されるのか、を考察しています。社会的弱者に対するメディア言説とジャーナリズム、国境を越える社会運動とメディア実践、ジャーナリズムの国際比較の研究を行っています。



黒木真理 准教授

海と川を移動して一生を送る回遊魚の研究をしています。長距離を旅するウナギやサケの行動生態は興味深く、人々の生活に根づいた生き物です。これらの資源量は近年減少しており、気候変動に対する回遊魚の環境応答や保全に関する研究を進めたいと考えています。子どもたちに回遊魚の魅力伝えるための絵本やWeb図鑑の制作にも取り組んでいます。



蜂須賀知理 講師

新領域創成科学研究科より流動教員として着任致しました。専門分野は人間工学、ヒューマンインタフェースです。顔表情計測や動作分析、生体信号計測による人の状態推定を活用し、革新的な学び・教育の確立に取り組んでいます。情報学環では、さらに多角的な学問領域・技術の融合による、人の状態適正化システムの構築に取り組んで参りたいと考えています。



河田ケルシ 助教

大学院医学系研究科臨床情報工学教室より助教として参りました。東北大学で人間脳科学を専攻し、博士号を取得した後、サンパウロ州立大学と電気通信大学での勤務を経て現在に至ります。認知的柔軟性の役割に重点を置いた視点をとるインターフェース、また、仮想現実を通じて新しいロボットアームを受け入れる神経プロセスの研究をしています。

令和3年度大学院学際情報学府 秋季学位記授与式

2021年9月24日、学際情報学府の秋季学位記授与式が福武ホールラウンジシアターで開催されました。新型コロナウイルス感染症の影響をうけ、一部の修了者と教員だけが集まり、その様子がオンラインで生配信される形式となりました。修士課程修了者15名と博士課程修了者5名に、山内祐平学府長と前田幸男専攻長より祝辞が贈られました。



令和3年度 秋季入学式・ガイダンス

2021年9月29日、学際情報学府の秋季入学式および入学ガイダンスがオンラインにて行われました。修士課程入学者15名と博士課程入学者6名が出席し、山内祐平学府長と前田幸男専攻長より祝辞が贈られました。

合格発表

2022年2月15日、令和4年度修士・博士課程冬季入試(2022年4月入学)の合格者発表がありました。出願者数は修士課程127名、博士課程48名でした。最終合格者数は、下記の表のとおりです。

| 冬季入試・修士課程合格者数 | | 冬季入試・博士課程合格者数 | |
|---------------|-----|---------------|-----|
| 社会情報学コース | 6名 | 社会情報学コース | 11名 |
| 文化・人文情報学コース | 9名 | 文化・人文情報学コース | 10名 |
| 先端表現情報学コース | 8名 | 先端表現情報学コース | 6名 |
| 総合分析情報学コース | 6名 | 総合分析情報学コース | 9名 |
| 合計 | 29名 | 合計 | 36名 |

記事:柳志岐(博士課程・編集部)

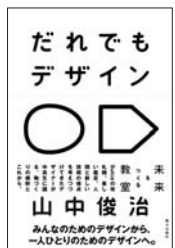
BOOKS



『災害情報 — 東日本大震災からの教訓』

関谷直也(著)
発行年月:2021年9月
出版社:東京大学出版会

本書は、東日本大震災を中心に、避難の問題、集合行動、メディア研究、東日本大震災以降の近年の災害情報の変化と受容の課題について、社会情報学、社会心理学の立場から体系的記述を試みたものです。コロナで出張もできず、宴会もできず、その辛さをぶつけたら、予定の倍の640頁になり、図らずも、流行りの『鈍器本』になりました。結果、高額になってしまい売れません。皆さんお読み頂ければ幸いです。(関谷直也准教授)



『だれでもデザイン — 未来をつくる教室』

山中俊治(著)
発行年月:2021年11月
出版社:朝日出版

本書は高校生のためのデザイン授業の記録をもとに書かれました。装飾の技法としてのデザインではなく、デザインという思考方法を伝えるものです。「なぜか気になる」を見逃さない。観察のためのスケッチ。アイデアの確率を上げる方法。ともかく作ってみる。他人の評価の活用法…など、誰もが未来を創造するための基本が書かれています。(山中俊治教授)



『視覚化する味覚 — 食を彩る資本主義』

久野愛(著)
発行年月:2021年11月
出版社:岩波新書

現代の色彩豊かな視覚環境の下ではほとんど意識されないけれど、私たちが認識する「自然な」色の多くは、経済・政治・社会の複雑な絡み合いの中で歴史的に構築されたものでもあります。食べ物の色に焦点を当て、資本主義の発展とともに色の持つ意味や価値がどのように変化してきたのかを、感覚史研究の実践により紐解きます。(久野愛准教授)



『検証 コロナと五輪 — 変われぬ日本の失敗連鎖』

吉見俊哉(編)
発行年月:2021年12月
出版社:河出書房新社

コロナ禍によって、1年の延期が決定した東京五輪。開催までの騒動は、私たちにあらためて「五輪とは何か」ということを考えさせる契機となりました。本書は64年五輪の成功体験とそれに囚われた2020年五輪の失敗をメディア論的に分析したものです。五輪が持つ根源的な問題を浮かび上がらせ、日本社会の変容を描き出しました。(加藤聡特任研究員)

<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp>

[あとがき]

GAKKAN NEWS LETTER としては、これまでにない、鮮烈な?!デザインの表紙ではないでしょうか?このところは毎号、表紙デザインの案を、マルヤマデザインさんに何案か提案いただき、編集会議を経て選ぶという形を採っています。58号表紙は、取り巻く時代の閉塞感を吹き飛ばすデザインに満場一致で決定しました。あらためて1号からの表紙の変遷を眺めてみると、その時代時代の世情、その中での学環・学府がどう立ち位置を目指したかが想像され、大変興味深いです。2022年春号は、果たして数年後の未来の私たちの眼からどのように映るでしょうか?久野先生のお話から、色彩について思いを馳せ、フレッシュな先生方のお顔ぶれ、新刊書籍の紹介新たな入学生、巣立つ人達・・・春一色の58号をお楽しみいただけたら嬉しいです。(山内隆治)

GAKKAN 58 2022.4

東京大学大学院 情報学環・学際情報学府

Interfaculty Initiative in Information Studies and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

mail: news@iii.u-tokyo.ac.jp

編集委員:岡 美穂子、神谷説子、福嶋政期、山内隆治、柳 志岐

デザイン:マルヤマデザイン